

---

# うたかたの紅茶嬢

ぺったんこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

うたかたの紅茶嬢

### 【Nコード】

N6579S

### 【作者名】

ぺったんこ

### 【あらすじ】

ただいま作成中につき、しばらくお待ちください。

## 作成中

「あれ、随分と早いおかえりで」

帰宅早々、俺を出迎えたのは欠伸混じりで気怠そうな居候の声だった。

その場にいない居候にただいまを告げて、上がってすぐの台所で本日の夕飯の支度を始める。1Kの部屋なんて一人暮らしの学生にとっては丁度良い、むしろ狭くて少ない範囲で行動できるのは何かと便利だ。だが、訳あってプライベートな部分は他の一人暮らしの者達より削り取られている。

何をしているのか気になったのか、居候少女が奥の居間から出てきてこちらにやってきた。その顔は例によって気怠るげだ。

「もう晩御飯なのか？多分まだ申の刻を少し過ぎたくらいだと思うけど」

居候少女は買ってきた食材と睨めっこして唸る。

説明が遅れたがこの少女はちょっと特殊で、時刻を辰時という。

理由は後ほど説明するが、とりあえずあまり普通の人間ではない。

「いや、これは仕込みだよ。食べるのはまだ後。それより燐、今日は外に出てないだろうな？」

これまた説明は後ほどするが、この居候もとい燐という少女は一人で外出すると悉く面倒事を起こすため、外出する際は俺の同伴が絶対条件となっている。

燐は一瞬恨めしそうな目でこちらを見ると外に出ているならこんなに暇そうにしてない、ともったもなことを言っただけのまま居間に戻っていつてしまった。

別に信用していないわけではないわけではないのだが、事実確認だけはきつちりやっておかないとやはり後々面倒なことになるのだ。

気を取り直して晩飯の準備に取りかかる。材料はじゃがいも、にんじん、たまねぎ、鶏肉がメインとなる、つまりはカレーと見せか

けてシチューだ。もう十一月の中頃、季節的にそろそろ寒くなってくるこの時期にはもってこいである。

作業は材料を切って炒めてルウを溶かして一緒に煮込むだけなので至って簡単だ、三十分もかからないだろう。

「よし、さつさと終わらせるか」

気合いを入れて包丁を握り、目下の課題に取りかかった。

仕込みを終えて居間に入ると、燐が新聞紙で先日教えた紙飛行機を作って遊んでいた。

「楽しそうにしてるじゃないか、一体どこが暇なんだ？」

畳に寝転がっている燐を跨いで、奥のソファーに腰掛ける。

「恭一、お前の目は節穴なの？これのどこが楽しそうに見えるんだ、是非とも聞きたい」

じろっ、と宝石のような紅い瞳に睨まれる。どうやら本当に機嫌が悪いらしい。

「わかったわかった、俺が悪かったよ。でも燐一人で外をうろついた結果、またこの間の一件みたいにならないと言い切れないだろう。あの時なんて俺がいかなかったらどうなっていたことか」

「あ、あれは相手が悪かっただけだ！流石の私でも原物が相手だと分が悪い。それにあいつ級の大物なんてそういないし、恭一は心配し過ぎなんだよ」

この間の一件とは、鈴が外出先でなんとなく気に入らないという滅茶苦茶な理由で、とある相手に喧嘩を売って返り討ちにあい、そこに駆け付けた俺の必死の謝罪によって許してもらったというなんとも情けない話のことである。

とはいえ今の発言を言い替えたなら、相手が例外以外なら喧嘩を吹っ掛けてもいいということですよ燐さん。全く反省の色が見られない気がするの俺だけでしょうか。

「はあ、左様ですか。喧嘩っ早いのは良くわかったんで、頼むから人間相手にそういうことはなしにしてくれよ」

そう言つと、燐は遊ぶのを止めて立ち上がりこちらのソファまでくると、そのまま俺の隣に腰掛けた。

「あのねえ、何度も言っけど私はお前以外の人間には興味なんてないんだ。というか人間を相手にして何の意味がある。アマの件だって最初から人外の者だって解ってやったことだし……っておい、聞いているのか？」

燐がずいっと顔を近づけてくる。

「近いっ！」

正直、俺はこういうのにあまり慣れていないものだから対応に困る。……しかし、毎度のことながらこいつ本当にいい匂いするよな。身の丈近くまである、黄金のように煌く透き通った金髪。時折見える宝石のような紅い瞳。そして端正な容姿。まさに神様の気まぐれの産物とも言える容貌は、彼女の中で最も人間味のないところだと言える。

そんな少女にある意味気に入られているのはこの上なく嬉しいのだが、いろいろと精神力を削られるので嬉しさ半分といったところだ。

「……何をそんな難しい顔をしてるんだ恭一。そんなに今の説明が難しかったか？ならもう一度噛み砕いて説明してやるつか？」

「それは問題ないから大丈夫、というか説明じゃなくて言い訳なそれ。それより」

時計を指差す。時刻は十八時前。それを見て燐は心底嫌そうな顔をしてソファに座りなおす。

「酉の刻……。恭一、あいつはこの時間にここに來るって言ったんでしょ？」

おう、と短く返事をして辺りを見回す。

燐を負かした相手は、去り際に敗者への罰ゲームをこちらに課してきた。曰く、別段陥れるためのものではなくお遣い程度のことをやってもらいたい、とのことで燐に罰ゲームという形で提案してきたのだが、当の本人は気を失っていたのでその場にいた俺が代理で

それを承諾したのである。そしてその詳細は本日酉の刻、つまり今伝えるということだったのだが、その相手は未だ姿を見せてはいない。

「なあ恭一、ひよっとしてあいつ忘れてるんじゃないか？ 思えば、結構間抜けそうな面をしていたような気も」

と、燐がそう言いかけた時、

「……失礼ねー。ちゃんとここにいるわよ？」

どこからともなく声が聞こえた。

慌てて周囲を見回してみる。しかしその声の主はどこにも見当たらない。

幻聴……いや、確かにはっきりと聞こえたからそれはない。現に隣で、燐が机の引き出しの中を一生懸命入り込んでしまいそうな勢いで覗いている。

「その声はアマだな、隠れてないでさっさと出てきて用件を言え！  
そして帰れっ」

遂に痺れを切らした燐が、部屋中とこころ構わず叫びながら何も無いところに掴みかかる。

すると、どこからかため息のようなものが聞こえ、声の主はようやくその姿を現した。押入れの中から。

「……………どうしてそこから出てきたんですか」

「え、ちゃんと人間のしきたりに従ってゲンカンから入ったんだけど、何か間違ってた？」

押入れから出てきた

押入れから出てきたアマと呼ばれる女性は納得のいかない表情をして首を傾げる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6579s/>

---

うたかたの紅茶嬢

2011年4月27日00時55分発行